

## 阮籍「獼猴賦」試論

田中順子

いわゆる「竹林七賢」の一人として知られる阮籍（二一〇—二六三）は、ただにその禮教をなみする放誕な所業によって歴代の人々に記憶されたばかりでなく、また文學史上においても、かの五言「詠懷詩」八十餘篇を始めとして、特筆に價する劃期的な作品を幾つか残している。ここに取り上げた「獼猴賦」は、まさしくそうした注目すべき作品の一つであるが、拙稿ではまず第一に、阮籍のこの「獼猴賦」が、ほぼ同時代の他の文人たちの手に成る詠物賦との關係において、いかなる位置を占めるのかを検討し、この賦の詠物賦としての特殊性を明らかにしたい。そうした上で、この「獼猴賦」を特徴づける表現上の特異性が、一體何に由來するものなのか、私なりに考察してみたいと思う。そしてその際、作品の獨自性の由來するところを、作者の精神構造に求めるといふ方向を取るつもりなので、この「獼猴賦」が同じ阮籍という作者の手に成った他の作品とどのように響き合うのかという問題をも念頭に置きつつ、論を進めてゆきたい。

ところで、かの『世說新語』任誕篇を數々の派手な逸話で飾る阮籍は、とかく自由瀟灑なイメージを我々に與えがちであるが、實際に彼の足跡を辿ってみると、絶對的な自由人というよりは、むしろ現實社會の只中に位置して、周圍の情況との駆け引きを通じて生命の保全を

圖った人物のように推察される。具體的に言えば、阮籍は、本來曹魏王朝と淺からぬ關係を持つ者でありながら、その曹魏を篡奪せんと目論む司馬氏の政權獲得を待つて始めてその傘下に身を寄せ、この新しい權力者の庇護を得ることによって天壽を全うし得たのである。このことは、たとえ阮籍がその作品の中で權力追隨者を罵倒していようと、清らかな仙界への憧憬を熱っぽく詠じていようと、彼の現實生活としては搖ぎない事實である。

ところが、從來の阮籍研究において彼の人間像を探ろうとする場合、この阮籍と司馬氏との關係については、すぐさま道義的にその是非を論ずるのなれば、概ねは考慮の枠外に放置されることが多かったように思う。すなわち、阮籍が司馬氏幕下にあったことを棚上げしておいて、欺瞞に満ちた禮教實踐者を部外者の立場から批判する、健康で自律的なモラリストとして、甚だしくは、滅びゆく曹魏王朝を追悼する愛國詩人として彼を評價するか、あるいは、その現實生活における苦惱を一舉に抽象化し、人間存在の根源に潛む虚妄性を鋭く見つめる、思索家としての阮籍像を描くことに終始しがちであったように思われる。だがしかし、阮籍の一見超俗的に見える奇矯なるまゝも、またその作品の至る所に吹き出す暗澹たる怨嗟の辭も、全て、彼

の現實社會との關わり方、すなわち彼が現實に司馬氏に仕えたということと、密接不可分に結び合っているのではないかと私は考える。この問題について考察する上でも、「獼猴賦」は極めて示唆的な内容を湛えた作品である。

一

阮籍の「獼猴賦」は、宮廷内に繋かれた獼猴オオザルの有様を描いた一種の詠物賦である。このように捕獲された動物を題材とする詠物賦は、後漢末以來、六朝の全時代を通じて盛んに作られており、阮籍のこの賦も、外見上の類型としては、この潮流の内部に編入されて然るべき作品ではある。だが、一步踏み込んで検討してみると、幾つかの點において、明らかに傳統的詠物賦の系譜から外れる、極めて特異な詠物賦であることが察知される。

まず第一に、獼猴という醜惡な動物を、敢えて題材に選び取ったこととからして異様である。しかも、阮籍はこの動物を描き始めるに當って、その邪惡さを次のごとく強調する。

夫獼猴直其微者也、それ獼猴はその微に直る者なれども、

猶繫累於下陳。猶ほ下陳に繫累せらる。

體多似而匪類、體は多く(人に)似たれども類には匪ず。

形乖殊而不純。形は乖殊して純ならず。

外察慧而内無度兮、外は察慧にして内には度なく、

故人面而獸身。故より人面にして獸身なり。

このように、捕獲された動物を描く際に、その醜穢さを主眼に据えた詠物賦は、少なくとも六朝時代以前においては空前絶後であると言つてよい。とりわけ阮籍以前の詠物賦では、概ね美しく秀でた動物

を、贊美と共感とを込めて詠いあげるのが普通である。例えば「美洲中之令鳥、超衆類而殊名」という冒頭に始まって、宮廷の鳥籠の中に閉じ込められた鸚鵡の心情を、そのものの身になって描いた曹植の「鸚鵡賦」などは、その典型的な例だと言えよう。そして、このように作者・描く對象・その作品を受け取る鑑賞者の三者が互いに共鳴し合う方向を目指す作風は、これら傳統の主流にある詠物賦が、本質的には社交的文藝であつたことに由來すると思われる。このことを推察させる資料として、やはり典型的な詠物賦である禰衡の「鸚鵡賦」には、次のような序文が付されている。

時に黃祖の太子射、賓客、大いに會す。鸚鵡を獻ずる者有り。酒を衡の前に擧げて曰く、「禰處士、今日用て賓を娛しましむるもの無し。竊かに以へらく、此の鳥遠きより至り、明慧聰善、羽族の責ぶべきものなり。願はくは先生これが賦を爲りて四坐をして咸く榮觀を共にせしめよ。亦た可ならずや。」衡、因つて賦を爲る。……〔文選〕卷一三

この序文から、この禰衡の「鸚鵡賦」が、宴會の席で一座の感興を盛り上げ、悅樂を共有せしむるために、主人ないし周圍の人々から要請されて作られたものであることが窺われる。作品の制作が、内發的な動機によるのではなく、このように外側からの要求や期待に答えるべくなされた場合、たとえ禰衡のごときアクの強い無官の文人であつても、おのずからその制約を受け、比較的無難で華麗な作品を作つて、その場を楽しませるようになるはずである。ところが翻つて阮籍の方は、獼猴という、人に嫌惡感を催させるような動物を殊更に取り上げている。してみると、恐らく彼はこの賦を、華やかな社交的雰圍氣の中に融け込んで詠じたのではなく、極めて個人的な視角から、並々な

らぬ意圖をもって創作したのではないかと推測される。

ただし、阮籍の取り上げた獼猴という動物それ自體は、當時の貴族社會においてそれほど奇異な存在ではなかつた。いやむしろ、滑稽な仕草で笑いを誘う道化者として、貴族たちに飼ひ馴らされ親しまれていたほどである。社交の場においても、違和感を醸し出すどころか、かえつてその場の空氣に變化を與え、愉快の振幅を増しさえしたようである。例えば、阮籍とほぼ同時代の文人である傅玄(二二七—二七八)は、その「猿猴賦」という作品の中で、寔たけなわとなるに及んで、與の赴くままに猿猴と遊び戯れたことを詠んでいるが、こうした事例は、サルという動物が、當時の貴族たちにとって極めて身近な存在であつたことを示すであらう。けれども私がここで注目したいのは、本來他愛のない道化者に過ぎぬ獼猴を、阮籍は敢えて邪惡なる者として規定し、その醜惡さを著しくデフォルメして描いている點である。既に擧げた「獼猴賦」本文の一節に續いて、以下の一段落では、この獼猴の醜態が言葉を盡くして述べ連ねられる。

性褊淺而干進兮、性は褊淺なるに進を干むること、

似韓非之囚秦。韓非の秦に囚はれしに似たり。

揚眉額而驟呻兮、眉額を揚げて驟りに呻り、

似巧言而僞眞。言を巧みにして眞を僞るに似たり。

藩從後之繁衆兮、從後の繁衆を藩とするも、

猶伐樹而喪鄰。猶ほ樹を伐りて鄰を喪ふがごとし。

整衣冠而偉服兮、衣冠を整へて服を偉にし、

懷項王之思歸。項王の(錦を飾りて故郷に)歸らんことを思ひしを懷ぶ。

就嗜慾而眄視兮、嗜慾に就りて眄視するさま、

有長卿之妍姿。長卿の妍姿のごとき有り。

舉頭吻而作態兮、頭吻を擧げて態を作り、

動可增而自新。動に増すを可として自らを新たにす。

沐蘭湯而滋穢兮、蘭湯に沐すれども滋穢れ、

匪宋朝之媚人。宋朝の人に媚びしがごときには匪ず。

終蚩弄而處紕兮、終に蚩弄せられて紕に處り、

雖近習而不親。近習と雖も親しません。

卑陋極まる獼猴が、その淺知恵を驅使して異國の君主に取り入る様を、阮籍は、かくも露骨な嫌惡感とともに、あくどいほど執拗に描き出している。このような毒舌が、先程ひきあいに出した當時の典型的詠物賦に見えないのは當然のことながら、唯一の例外として、この「獼猴賦」と同じく、秀麗ならざる動物であるサルを詠じた後漢の王延壽の「王孫賦」にも、これほどまでに惡意に満ちた描寫は、やはり全く認めることができない。たしかに王延壽も、サルの姿態や所作の陋醜さに注目して「有王孫之狡獸、形陋醜而醜儀」と言つてはいる。だが彼の眼目は、その醜態を暴きたてることにあるのではなく、サルの珍妙な容貌や仕草、習性などを、微に入り細を穿つて描き盡くし、それによつて神秘玄妙な風趣を醸し出すことにあるようである。つまり、サルという一風變つた趣を持つ動物に對して、王延壽は純然たる好奇心を寄せているだけに思われる。ところが片や阮籍の方は、もはや獼猴の生態を素直に活寫したとは到底言えず、對象への憎惡にも似た嫌惡感によつて著しく歪曲した描き方をしている。このような對象に對する險しいまなざしが、かの社交的寡圍氣とは全く相容れぬ性質のものであることは言うまでもない。ただここで、この賦が獼猴という貴族たちのペットを描いているからには、阮籍もまた

彌猴と同じく貴族社會の枠内に位置しているわけではある。が、その華やかな社會の中にありながら、彼は、周圍の空氣に全くそぐわぬ孤立した視點から、突き放すような冷ややかなまなざしで、この道化者を見つめているのである。

ところで、從來この賦は、以上に見てきたような阮籍の彌猴に對する露骨な嫌惡感を、かの「阮籍白眼」の故事に重ね合せて、次のように解釋されるのが普通であった。すなわち、彌猴とは權力者に阿諛追從する弱小貴族の象徴であり、いわゆる「方外の士」たる阮籍は、超越的な立場から、かかる俗物どもを白眼視したのである、と。しかしながら、この作品を超越者による一方的な俗物批判の表出と見なすことに、私は少なからず躊躇を覚える。なぜならば、阮籍の彌猴に對する嫌惡感は常軌を逸しており、もはやそこには超俗の人としての餘裕や平靜さがほとんど認められないからであるし、そして何よりも決定的なのは、この賦が徹頭徹尾彌猴への非難、すなわち惡意に満ちた醜態の描出に終始するのではなくて、その終末部分には、次のような屈折極まる言辭を連ねているからである。

嬰微纒以拘制兮、微纒を嬰らされて以て拘制せられ、  
顧西山而長吟。 西山を顧みて長吟す。

緣榭桷以容與兮、榭桷に緣りて以て容與するも、  
志豈忘乎鄧林。 志豈に鄧林を忘れんや。

庶君子之嘉惠、君子の嘉惠を庶ひ、  
設奇視以盡心。 奇視を設けて以て心を盡くす。

且須臾以永日。 且は須臾以て日を永くするも、  
焉逸豫而自矜。 焉くんぞ逸豫して自ら矜らんや。

この一節は、彌猴の醜態をひたすら暴きたてるがごとく描出した前

述の一段落とは打って變わり、あたかも阮籍が彌猴に乗り移り、みずからの内心を吐露するかのような口ぶりとなっている。つまり、前の段落において惡むべき他者であった彌猴が、この一節に至って不意に阮籍の内面に滑り込み、彼と合體してしまったわけである。ただ、このように作者とその描く對象とが一體化する事例は、實は傳統的詠物賦にもしばしば見られるものではある。けれどもその場合は、たとえ作者がその對象から距離を置いてナレーターのごとき第三者の立場を取っている時でさえ、彼の目はびったりとその對象に寄りそい、共感と贊美とを基底に据えている。それ故、表現上兩者が突然重なり合うに至っても、我々讀者にはほとんどその境目を感じさせない。ところが、阮籍のこの賦においては、彌猴に對する嫌惡感と共感という、全く相對立する姿勢が隣り合わせに同居している。言い換えれば、阮籍にとつて彌猴とは、他者であると同時に自己なのである。

そして、だからこそ、上に擧げた一節で阮籍と一體化した彌猴は、彼自身の内部に、みずから突き放して觀察する彌猴と、その觀察された自己の有様を躍起になって打ち消そうとする彌猴とを生み出すのである。このことは、「緣榭桷以容與兮、志豈忘乎鄧林」及び「且須臾以永日、焉逸豫而自矜」という、いずれも難詰するがごとき反語表現を伴った句に、端的に看取することができる。すなわち、この兩句が言葉として發せられた時點で、この彌猴の胸中には「榭桷に緣りて以て容與し、志、鄧林を忘れ」また「逸豫して自ら矜る」がごとき自己の有様が、すでに明確な輪郭をもって現われていること、更にその自覺せられたわが汚濁を、敢えて切り返し否定することによって何とか振り拂おうとものがいて、それが露呈するのである。そして、ここで阮籍と合體した彌猴が躍起になって打ち消そうとしている彼自身の

有様とは、取りも直さず、前の一段において、阮籍が口を極めて罵倒した獼猴の醜態に他ならない。

以上のように、阮籍がこの賦で描く獼猴は、みずからの内部に自己を見つめる自己、いわば内なる他者を有しているわけであるが、これは他の詠物賦には全く認められぬ、この賦の特異点であるように思う。今このことを、阮籍の「鸚鵡賦」との比較を通じて明らかにしてみたい。

さてこの禰衡の賦においても、その後半部分に作者が鸚鵡に成り代つてみずからの境遇を嘆くくだりがある。ここでは、この珍鳥もまた阮賦における獼猴と同様に、華やかな殿閣に捕われた情況の下で、わが故郷たる「崑山の高嶽を想ひ、鄧林の扶疏たるを思つ」ている。だがそれは畢竟、やむなく異郷の地に拘束された現實への鬱憤が裏返されたものにすぎない。だからこそ、一旦歸郷への望みが断たれると、すぐさま君主に忠誠を誓い、その恩澤にすがって生き延びようとして俾らないのである。すなわち阮籍の「鸚鵡賦」には言う。

願六翮之殘毀、六翮の殘毀せるを願ふるに、  
雖奮迅其焉如、奮迅すと雖も、それ焉くにか如かん。  
心懷歸而弗果、心に歸らんことを懷へども果されず、  
徒怨毒於一隅、徒らに一隅に怨毒す。

苟竭心於所事、苟くも心を事ふる所に竭くさば、  
敢背惠而忘初、敢へて惠に背きて初めを忘れんや。

託輕鄙之微命、輕鄙の微命を託し、  
委陋賤之薄軀、陋賤の薄軀を委ねん。

期守死以報德、死を守りて以て德に報いんことを期し、  
甘盡辭以效愚、辭を盡くして以て愚を效すことに甘んぜん。

侍隆恩於既往、隆恩を既往に恃みたり。

庶彌久而不渝、庶はくは彌久に(恩情の)渝はらざらんことを。

以上の句に見て取れるように、この禰衡の賦における鸚鵡は、生存のために身を屈して君主に仕えるという君臣關係、及びその中に位置する自己のあり方そのものに對しては何ら懷疑を交えず、専ら現實のレベルでわが身を束縛するものへの鬱憤があるばかりである。ところが一方阮籍の描く獼猴は、拘束されることへの、いわば外側からの壓力に拮抗せんとする憤怒よりは、むしろ君主にへつらう自分自身への苛立ちの方がはるかに強いように思われる。すなわち、先程例として提示した、反語表現を伴う二つの句に端的に窺えるように、この獼猴は、本來の棲息地たる鄧林も忘れ、淺薄な榮華に溺れがちな日頃のわが生活態度をまざまざと自覺している。だからこそ、そのみずからの醜穢さを必死になつて打ち消そうとしたのではあるまいか。このように見てくると、「庶君子之嘉惠、設奇視以盡心」という句は、君主に媚びる自分を醒めた目で觀察し、その内心の偽らざるところを正面切つてえぐり出した、いわば開き直りの言葉であるようにさえ思われる。

以上を要するに、阮籍と一體化した獼猴は、その内部に自身を客體化するもう一個の自己を持つ。そして、この客體化され斥けられた自己とは、言うまでもなく、前述の一段落十數句に、その醜態を述べ連ねられた獼猴に他ならない。これを阮籍の立場から言い換えれば、彼は獼猴の醜態を外側から描寫したばかりでなく、その内部に踏み込んで、わが醜態を自覺しつつも自己辯護せずにはおれぬ獼猴の心情を、共感的に描いている。であるからには、從來の説のごとく、獼猴とは權力者に媚びる弱小貴族の象徴であり、超越者たる阮籍はかか

る俗物どもを白眼視したのだと、このように一面的な二元論ですっきりとこの「獼猴賦」を解釋することは不可能であること、今さら贅言を要しない。

それでは、獼猴とは阮籍にとって一體何者だったのか。私は今ここで、獼猴のモデルを直接に現實世界の中に求めることは敢えてしない。ただ、詠物賦において、作者がその描く対象と上述のごときかくも複雑な關係を取り結ぶのは、當時、阮賦において他には全く存在しないことを確認し、かかる阮籍の文學史上における孤立が、いかなる必然性を持って生じたのか、そこを問題視したいのだということを書いておきたい。

さて、阮籍は獼猴と合體し、そのものの身になって心情を吐露した後、間髪を入れず次のごとき結句を疊み掛ける。すなわち、

斯伏死於堂下、斯に堂下に伏死し、

長滅没乎形神。長に形神を滅没せん。

「堂下に伏死す」とは、この場合、捕えられた異國の宮廷内でわが醜態を衆目に曝したまま、地に這いつくばってのたれ死ぬことを言う。しかも、この恥辱のどん底で、彼は自己の肉體も精神もふたつながら、永久にこの世から抹殺しようとするのである。

このように、阮籍は獼猴を完璧に殺す。くだいようであるが、當時の一般的な詠物賦は、概ね捕獲された動物が主人に對して恩情を請うところで終結し、死に至る例は稀である。もし動物の死自體をテーマとする場合には、例えば曹植の「神龜賦」のように、手厚く弔いの辭を手向けてやるのが普通である。ところが、阮籍のこの賦はそのような温情を一切交えず、ただ非情にも恥辱にまみれた獼猴の死を突き放すように記すだけなのである。これは、もはや傍觀者的餘裕を持つ寫

實的描寫のごときものではなく、むしろ憐れみや同情の言辭を排除することによって、獼猴に對する嫌惡感を積極的に表出したものではないかと私は考える。

## 二

ところで、阮籍は「鳩賦」という作品においても、恩情を求めて主人に愛敬を振りまく健康な鳩をすら、冷酷な死に突き落としている。この鳩は、初め「雲霧を噙いて以て消息し、朝陽に遊びて以て相從ふ」がごとき悠々自適の幸福な暮らしを営んでいたが、「金風の蕭瑟たるに遭ひ」、一家離散を餘儀なくされて、みずから「草萊に背きて以て仁を求め、君子の靜室に託し」たのであった。だが彼はその何ん自由なく安逸な人家での生活に、心安らかに満足しているわけではない。すなわち、この鳩は阮籍の口を借りて、次のように自己の内心を開陳するのである。

聊俛仰以逍遙、聊か俛仰して以て逍遙し、

求愛媚於今日。愛媚を今日に求む。

何飛翔之羨慕。何ぞ飛翔をこれ羨慕せん。

願投報而忘畢。願はくは投報して畢を忘れんことを。

この鳩は、みずから意圖して人家に身を寄せただけあって、主人に對するわが媚態を、かなり冷靜に客觀視しているように察せられる。とりわけ第四句目に言う、主人の恩澤に報いんことに自己を没頭させ、それによって、網の目に絡められた現在の境遇をしばし忘却しようという表白は、主君に對してひたすら命乞いをするしか知らぬ、當時の一般的詠物賦の主人公たちとは大きく異なり、ふてぶてしいまでの覺醒ぶりを如實に表現している。ところが、かくも自覺的に拘束さ

れた境遇を生きる鳩は、思いがけなくも實にあっけなく狂犬に食い殺されてしまふのである。

値狂犬之暴怒、狂犬の暴怒に値り、

加楚害於微軀。楚害を微軀に加へらる。

欲殘没以糜滅、殘没して以て糜滅せんと欲するとき、

遂捐棄而淪失。遂に捐棄せられて淪失す。

ここでも阮籍はやはり、かの「獼猴賦」と全く同様に、殺された鳩に對して何ら同情的な言辭を用いず、ただ冷酷非情にその殺害された事實を記すだけである。この「鳩賦」と「獼猴賦」は、それぞれそこに描かれた動物こそ異なつてはいるが、その無殘な最期を一點の憐憫も交えずに書きつけ、もつて賦の終結とする點では共通している。そして更には、鳩と獼猴兩者ともども、拘束された境遇の中で、主君に媚を賣つて生き延びる自己のあり方を冷ややかに自覺している點でも共通している。阮籍はこの鳩や獼猴のような生き方に對する名狀し難い嫌惡感を、その對象を抹殺するという究極的な手段によつて、何とか拭い去らうとしたのではなからうか。そして、嫌惡感を昇華するために阮籍がかくも激越な手段を必要とした理由は、すでに「獼猴賦」に就いて詳説したごとく、鳩や獼猴が阮籍と何ら交わりのない他者、つまり一方的非難の對象物ではなく、彼とその内面の一端を共有する近親者、極言すれば作品上に現われた彼自身の分身であつたからにはかならない。ちなみに、この「鳩賦」の制作年代を推測させる資料として、その序文には次のように言う。

嘉平中得兩鳩子、常食以藜稷、後卒爲狗所殺、故爲作賦。

ここに言う「嘉平中」とは、西曆二四九年、司馬懿・師父子が大將軍曹爽を謀殺し、事實上政權を獲得してからの五年間、すなわち曹氏

から司馬氏への政局轉換期に相當する。この時阮籍は四十代前半、それまでの慎重な隱遯生活を打ち切り、初めて太傅司馬懿、ついで大將軍司馬師の従事中郎として本格的に起家した時期に當たる。この「鳩賦」の制作時期を嚴密に確定することは不可能に近いが、少なくとも上述のごとき情況をくり抜けた末に成つた作品であることは確かである。序文で「嘉平中」という年代を敢えて呈示していることを考へ合わせると、この賦における鳩と作者阮籍の現實生活とは、同一レベルではないにせよ、あるいは何らかの類比性を持つていとも考えられる。

### 三

阮籍は「獼猴賦」において、異國の宮廷内に繋かれた獼猴が媚態を盡くして主君に取り入る有様を、嫌惡感もあらわに羅列したその直後、今度はこの醜惡極まる動物の内面に滑り込んで彼の心情を代辯した。このように、一篇の作品の中で、描こうとする對象を複数の異なつた視點から捉える賦として、上述の「獼猴賦」及び「鳩賦」以外にも、これから取り上げる「首陽山賦」がある。

さて、まずこの「首陽山賦」の前半部分を大きく占めるのは、「時將に暮れなんとするも、儻無く、慮ひ悽愴として心に感ずる」がごとき、震えおののくような孤獨感である。そしてこの孤獨感、周圍の情況と自己との間に埋め難い斷絶を認識することによつて生ずる、妻絶なまでに切迫した自我意識であるように思われる。

將脩飾而欲往兮、將に脩飾して往かんと欲すれば、

衆離離而笑人。衆は離離として人を笑ふ。

靜寂寞而獨立兮、靜寂寞として獨り立ち、

亮孤植而藤因。亮として孤り植ちて因るべなし。

懷分索之情一兮、分索の情の一ならんことを懷ひ、

穢羣偽之射眞。羣偽の眞を射るを穢れとなす。

信可實而弗離兮、信に實を可として離かざるも、

寧高舉而自儉。寧ろ高舉して自ら儉けん。

この一節に窺われるように、阮籍は、現在自分が位置している社會からも、また曾て親しく交わった友人たちからも隔絶した、いわば孤立した點のごとき存在である自己を鋭く認識している。ところで凡そ自己疎外感を持つ人間は、しばしば同じく社會から離脱したアウトサイダーに共鳴し、密かに自己を同一化させたりしがちであるが、ところが意外にも、阮籍は我々のこの安直な豫想を裏切つて、かの高名な二人の隱者伯夷叔齊に對して手厳しい批判を投げかけるのである。まず、孔子をして「求仁得仁、又何怨乎」と贊嘆せしめた彼らに、次のごとき自己辯明をさせる。

寔囚軋而處斯兮、寔に囚軋せられて斯に處るに、

焉暇豫而敢諱。焉くんぞ暇豫して敢へて諱らんや。

嘉粟屏而不存兮、嘉粟屏けられて存せず。

故甘死而採薇。故に死に甘んじて薇を採る。

彼背殷而從昌兮、彼は殷に背きて(西伯)昌に従ひ、

投危敗而弗遲。危敗に投じて遅たず。

此進而不合兮、此は進みて合せず。

又何稱乎仁義。又何ぞ仁義に稱はんや。

そして、この伯夷叔齊の獨白に對して、阮籍は次のような批評を下す。

肆壽夭而弗豫兮、壽夭を肆にして豫まらず。

競毀譽以爲度。毀譽を競ひて以て度と爲す。

察前載之是云兮、前載の是云を察するに、

何美論之足慕。何ぞ美論の慕ふに足らん。

苟道求之在細兮、苟くも道求の細に在らば、

焉子誕而多辭。焉くんぞ子(子)の誕りか誕にして辭多からんや。

且清虛以守神兮、且つ清虛にして以て神を守らば、

豈慷慨而言之。豈に慷慨してこれを言はんや。

以上に見るごとく、伯夷叔齊が名譽を重んずるあまり生命をないがしろにしたこと、そして未練がましく自己辯明することを、阮籍は殊更に厳しく難詰する。かくも冷酷な夷齊批判は、從來に全くその比類を見ない。

それでは、阮籍はなぜ、これほどまでに激しく伯夷叔齊を非難しなければならなかったのだろうか。思うに、阮籍のこの特異な夷齊觀は、彼が世俗から距離を置いた傍觀者として、世の既成概念に惑わされぬ冷徹で合理的な物の見方をしたから、という説明では、到底その由來を解明することはできない。なぜならば、實際のところ阮籍は生々しい現實社會の只中に位置して、その現實を痛苦としてわが身に受け止めながらこの賦を詠じたからであるし、またそれだけに、彼が伯夷叔齊を批判した數句を検討してみると、必ずしも客觀的批評とは言えない、評者と評された者とのオーバラップが一部に認められるからである。

そこで、今しばらく作品そのものから離れて、この「首陽山賦」の作られた背景に立ち入ってみたい。阮籍は次のような序文を付して、この賦を制作した情況をみずから呈示している。すなわち、



正元元年秋、余尙爲中郎、在大將軍府。獨往南牆下、北首陽山、賦曰。

ここに言う「正元元年秋」とは、西曆二五四年、司馬氏が魏朝に取って替わるまでの一連の動向の中でも特筆すべき事件の起こった時期に當たる。すなわち、この年の九月、大將軍司馬師は、政權奪回を圖ろうとする動きを見せた魏帝曹芳を廢し、十月初め、代わりに當時十四歳の高貴郷公髦を擁立する。そして、これに先立っては、曹芳としては密議のあった李豊、及び夏侯玄・許允ら、正始年間に王室擁護派として活躍した人物たちを一掃している。阮籍はこの間、大將軍司馬師の從事中郎としてその幕府に詰めながら、上述のごとき陰惨な事件の一部始終を目の當たりにしてきたわけである。こうした現實社會の中で、彼は周圍の情況から一人浮き上がった異質な存在である自己を痛切に自覺する。そしてこの孤獨感を癒すべく「獨り南牆の下に往き、首陽山に北する」ところから、この賦は始められるのである。ただ阮籍はこのように孤立した自我意識を持ちながらも、その意識の周圍に壁を築き、現實社會との接觸を避けていたのではない。むしろ、過敏なまでに現實の情況を感知し、それを自己との抜き差しならぬ關係において切々と認識していたように察せられる。このことは、彼の孤獨感の表白が多く現實社會への即事的な反感によって占められていることにかえって如實に表出されている。いささか逆説めくようではあるが、阮籍は現實の情況に深く關われは關わるほど、それへの抵抗意識を強め、孤獨感を増すことになつたのである。

このように見てくると、阮籍が當時の時代情況から完全に離脱して、純粹に客觀的な視點を持ち得たとは考えられない。彼のこの「首陽山賦」における極めて獨創的な伯夷叔齊觀は、むしろ、彼が生々し

い現實社會の渦中に位置したそのことに、表裏一體のごとく密着して、いるように思われる。つまり、阮籍は社會と自己との間に緊迫した交渉關係を操っていたからこそ、似たような時代情勢の中に置かれながら、自分とは異なった選擇をなしたこの二人の隱者に對して、平靜な距離を保てなかつたのではないかと思ふのである。まず第一に、伯夷叔齊が生命を犠牲にしてまでも清廉潔白であることを固持した、そのかたくなさを阮籍は批判するが、これは、隱者をあげつらい、その價値を相對的に引き下げることによって、何とか自己の立場を正當化しようとしたものではあるまいか。つまり、司馬師幕下に歸屬している現在の自分のあり方に對して、阮籍はある種の後ろめたさを感じており、この漠然とした精神的不安定感が、彼を夷齊批判へ驅り立てたのではないかと思われる。しかしながら、阮籍は伯夷叔齊を完全な他者として斥け切っているわけではない。彼らに向けたはずの批判のうち、あるものは圖らずも自分自身に跳ね返つてもいるようである。すなわち、心中に暗澹たるわだかまりを抱えて、のびのびと心樂しく安らうこともしない夷齊を譏る阮籍は、自己の内側に黒々とどろろを巻いてうずくまる憤懣をも同時に見つめていたであらうし、また、この二人の隱者が世捨て人ながら、實は世間から附與される榮辱をその行動の規範としたことを批判するのも、後ほど論及するように、阮籍自身がこの社會的價値觀に對して決して無關心ではなかつたことと密接に聯繫していると思われる。阮籍は、彼自身の中にある疎ましき伯夷叔齊との共有部分を、無意識のうち完全に彼らに假託し、その彼らを譏ることによって、彼らとの癒着面を何とか自己から切り捨てようとしたのではなからうか。そして、終末の四句、すなわち「虚心を守って慎重にわが道を摸索してゆくのであれば、何も口繁く自己辯明する

必要はないではないか」という難詰も、伯夷叔齊に向けた非難である以上に、彼自身にこそ反響してくるもののように思われる。伯夷叔齊をして饒舌に語らせ、またそれに對して更に饒舌に批判を返したのは、他ならぬ阮籍自身なのだから。

以上を要するに、現實社會において疎外された自己を認識する阮籍は、大將軍府を離れて一人首陽山に向かうが、その孤獨感を伯夷叔齊と同化することによって解消するのではなく、かえって冷酷な批判を浴びせてこの高名な隱者を貶める。しかも、彼らに對する非難の一部は、圖らずも評者自身に跳ね返るものともなっている。「首陽山賦」における、阮籍のこの屈折した伯夷叔齊觀は、現實社會内における現在の自己のあり方について、彼自身、精神的不安定感を抱いていたこと、より具體的に言えば、司馬師幕下にある自己へのある種の後ろめたさに由來すると思われる。阮籍は、現實社會の枠内にも、またその境界外に確乎たる位置を占める隱者にも、自己を歸屬せしめることができない。彼はどこまでも孤獨なのである。

#### 四

以上三章にわたって見てきたように、阮籍は賦を詠ずる際、描こうとする對象から常に乖離し、これと全面的に同化することは皆無に等しい。すなわち、「獼猴賦」「鳩賦」においては、貴族社會内に繋がれ、恩澤を求めて主君におもねる動物と、その内面の一端を共有するが故に、近親憎惡的な嫌惡感をもってこれを斥け、また一方「首陽山賦」においては、世俗の境外に敢然と位置する伯夷叔齊に對して、それへの違和感と、一種の引け目のようなものを感じるが故に、自己の弱みを彼らに投影し、これを譏ることによって相對的に彼らの價值を

引き下げようとする。つまり、彼は賦という作品の中において、現實社會の内と外、そのいずれにも自己を同化させるべき對象を持たないのである。この點において、阮籍は當時の文學史上に全く孤立した位置を占める。

そして、文學史上における阮籍のこの孤立は、また彼自身の内側に横たわる孤獨感とも符合するように思われる。すなわち、みずからの内面を對象として詠んだ「詠懷詩」八十餘篇において、阮籍は繰り返して世俗を否定し、その對極に浮かぶ神仙界へ飛翔せんと試みながら、結局はそのどちらにも安住の地を求め得ず、しかも、この孤獨感を媒介に共鳴し合う友人もないまま、一人異質な存在として現實社會内に留まり續ける苦悶を連綿と詠み綴るのである。彼が俗世間を激しく嫌惡しながら、かといって神仙界に没入し切れるわけでもなく、兩者の間に據り所もなく立ちすくむその八方塞がりの閉塞感を、例えば次に擧げる其七〇の詩などは如實に表出している。

天網彌四野、天網、四野に彌り、

六翮掩不舒。六翮、掩はれて舒びず。

隨波紛綸客、波に隨ふ紛綸の客、

汎汎若浮鳧。汎汎として浮鳧の若し。

生命無期度、生命に期度なければ、

朝夕有不虞。朝夕に不虞あらん。

列仙停修齡、列仙は修齡を停め、

養志在冲虛。志を養ひて冲虛に在り。

飄飄雲日間、雲日の間に飄飄し、

邈與世路殊。邈として世路と殊なる。

榮名非已實、榮名は己が實に非ず。

聲色焉足娛。聲色、焉くんぞ娛しむに足らん。  
採藥無旋返、藥を採るも旋返するなく、

神仙志不符。神仙、志は符はず。

逼此良可惑、此に逼られて良に惑ふべし。

令我久躊躇。我をして久しく躊躇せしむ。

この詩は『楚辭』の「卜居」を構想の下敷きとして、世俗の「波」に浮き沈みする「紛綸の客」と、現實から遙かに隔たった世界で「養志」に勵む「列仙」という二つの選擇肢を呈示する。けれども、「卜居」が疊み掛けるような疑問の形式を取ってはいいても、その根柢に明確な解答を準備しているのは異なつて、阮籍の方は、文字通り「久しく躊躇し」ているように思われる。というのは、「詠懷詩」諸篇中、世俗を譏つたその反動として、ほとんど衝動的に俗外の世界へ思いを馳せるという詩が、一つのパターンを形成するほどに多數存在し、またそのような場当たり的な脱俗志向の當然の歸結として、神仙そのものに向き合つた時、強い違和感に襲われねばならなかつたことを告白する詩（例えば其七七）がまた一方に存在するからである。

この點、阮籍としばしば並び稱せられる嵇康は、「養生」という自己肯定的に邁進し得る道を持っていたので、たとえ現在の自己が目ざす完成されたそれに程遠くとも、またたとえ現實社會において自己疎外感に曝されようとも、阮籍のような意味での孤獨は知らなかつたのではなからうか。自己という究極の據點からは、乖離していないのだから。

さて、阮籍は世俗の内と外と、この二つの世界の間を絶え間なく往き來しながら、結局はこの現實社會の内側に留まり續けたようである。このことは、「詠懷詩」諸篇の中で、飽くことなく繰り返し世俗

を非難することに端的に表われている。しかもその際、根強く絡み付いたものを敢えて振り切るような語氣を持つ反語表現を、大抵の場合伴っている。今この中から、最も典型的な例としては、以下のような詩句が抜き出せる。すなわち、

・布衣可終身、寵祿豈足頼。（其八）

・豈爲夸譽（與）名、憔悴使心悲。（其一〇）

・千秋萬歲後、榮名安所之。（其一九）

・是非得失間、焉足相譏理。（其三三）

・保身念道眞、寵耀焉足崇。（其七七）

かくも執拗に俗世間を斥けようとすることは、阮籍が超俗的志向を強く抱き續けたということ以上に、彼の世俗との関わりの根深さを物語つていよう。つまり、絶えず意識して排斥せねばならないほどに、彼の身邊には混濁した現實社會内の諸事象が纏わりついていたことを、「詠懷詩」諸篇を貫くこの際立つた表現的特徴が端的に表わしているのである。ちなみに、このように意識的な反語表現の用い方をするのは、相前後する時代を見渡しても、阮籍ただ一人である。

## 五

阮籍は、世俗の内に留まり續ける限り、二重の孤獨を生きねばならなかつた。すなわち、自己と周囲との間に斷絶を意識するその一方で、自分自身からの乖離、つまり自己嫌惡感にさいなまれねばならなかつたのである。それでは、彼はなぜ、これらの苦惱を一舉に解決すべく、世俗の外へと飛び立ってゆかなかつたのだろうか。阮籍の生きた魏晉の間という時代、現實社會からの離脱を實現しようとするれば、その行爲を支える思想的基盤として、いわゆる莊子的思想がすでに準

備されていたはずである。ところが阮籍は、やはり時代の子としてこの新しく脚光を浴び始めた思想をいち早く取り込みはしたものの、決してそれをストリートに全面的に受容したのではなかった。すなわち、かの「獼猴賦」の冒頭一段落において、彼は次のような議論を展開するのである。

まず、その昔、禹が天下を平定するとともに、全国各地から様々な珍獣怪物が驅り集められたことを述べ、これら皇帝のためにその身を捧げた神物たちに對して、「これ、その壯なるを以てその生を殘ひし者なり」と批評する。次いで今度は、自己の才能や意志をあらわにしたがために生命の危機に瀕した者を列擧し、彼らに對してもまた次のような批判を下す。すなわち、

處間曠而或昭兮、間曠に處りて昭るきに或ふ。

何幽隱之罔隨。何ぞ幽隱にこれ隨ふ罔きや。

さて、ここまでは一見して明らかのように、保身のためには貴顯を放棄して身を潛めよと説く、いわゆる莊子の思想の忠實な翻案である。ところが、阮籍はこれに續けて、みずから開陳しかけたこの思想を、懷疑でもって次のようにねじ曲げてしまっているのである。

颺長逼以潛身兮、颺は長逼して以て身を潛め、

穴神丘之重深。神丘の重深なるに穴る。

終或餌以求食兮、(しかれども) 終に餌に或ひて以て食を求むれば

焉鑿之而能禁。焉くんぞこれを鑿ちて能く禁めんや。

誠有利而可欲兮、誠に利ありて欲すべくんば、

雖希覲而爲禽。雖ゆること希なりと雖も禽と爲る。

この一節は、語句の上では『莊子』應帝王篇中の一句「颺鼠穴乎神丘之下、以避熏鑿之患」を典據とする。だが原典という颺鼠が神丘に

隠れることによつて無事に禍患を避けおこなったのに對して、阮籍が言う所の颺は、一旦穴に籠りはしたものの、終には餌に惑わされて表に現われ、あえなく捕獲されてしまう。つまり、食物という目先の利欲に動かされて、中途半端に隱棲を打ち切ったわけである。それだけに、初めからその壯麗なる容姿や卓絶した資質を堂々と顯示した者たち、その生命と引き替えに永遠の稱贊をかち得るのとは對象的に、この卑屈な小動物は、皆の前でしばし笑ひ者にされるだけである。すなわち、

故近者不稱歲、故に近き者は歲にも稱はず、

遠者不歷年。遠き者は年を歷ず。

大則有稱於萬年。(しかれども) 大いなるものは則ち萬年に稱あり。細者爲笑於目前。細なる者は目前に笑ひと爲る。

この乾いた嘲笑をもつて、「獼猴賦」冒頭の議論は締め括られる。そして、この救いようもなく卑小な颺と同類の存在として、かの獼猴は登場するのである。要するに、阮籍は、保身を圖るならば目立たぬ存在に甘んずべきだということを、理屈としては十分に了解していたが、内心では、この莊子の處世觀に對して素直に承服することを肯んじきれなかったようである。

ただ、しかしながら、阮籍はいかなる場においても一様に、莊子の思想への懷疑を標榜したわけではない。むしろ、對外的には、この一種のイデオロギーによつて自己武装していたように察せられる。例えば、その「答伏義書」においては、かの莊子のレトリックを駆使して、彼の反社會的態度を難する伏義の執拗な詰問を綺麗にかわしている。また、西晉に入つて活躍する張華(二三三〇)の青年時代の作品に、いわゆる莊子の自足の思想をテーマとした「鷓鴣賦」がある

が、これを讀んだ阮籍が、作者張華を「王佐之才也」と高く評價したという逸話が傳えられている。事の眞偽はともかくとして、少なくともかかる逸話がいかにも阮籍にふさわしい逸話として語り繼がれるほどに、彼が周圍の人々から莊子的思想の體現者と見なされていたことは確かであろう。そして、拙稿の論旨からは外れるが、當時、この莊子的思想が隱者としての實踐に結びつくなしに、官界へのデビューの契機となつたことに私は興味を覺える。それはともかくとして、思うに、『莊子』に言うところの萬物齊同説、すなわち、いかなる存在も各々それなりの價值を持つからには、到底單一の秩序體系に從屬せしめることはできないとする理論は、阮籍にとつて、自己のかけがえない本性を世俗の侵害から守るための砦として、恰好のイデオロギーであつたに違いない。だが、他者との緊迫したやりとりを離れて莊子そのものと差し向かいになつた時、そのあまりに純粹觀念的な哲理に、阮籍は何か割り切れぬものを感じていたのでないだろうか。ちなみに、「詠懷詩」の中でこの莊子的萬物齊同の思想が詠ぜられる場合は、概ねその背後に韜晦を強いるのっぽきなならない情況の迫っていることが暗示され、しかも例のごとく、反語表現による、執着を敢えて振りほどくような口吻を伴うのが常である。例えば、阮籍の莊子的思想を最も鮮明に表す作品としてしばしば引用される其二六の詩でさえ、言葉の端々に、卑小な存在に甘んぜねばならぬことへの負けおしみの語氣が窺える。

鸞鳩飛桑榆、鸞鳩は桑榆に飛び、

海鳥運天池。海鳥は天池を運る。

豈不識宏大、豈に宏大なるを識らざらんや。

羽翼不相宜、羽翼、相宜しからざればなり。

扶搖安可期、扶搖、安くんぞ期すべけんや。

不若栖樹枝、樹枝に栖むに若かず。

下集蓬艾間、下は蓬艾の間に集まり、

上遊園圃籬、上は園圃の籬に遊ぶ。

但爾亦自足、但だ爾きのみなるも亦た自足す。

用子爲追隨、子を用て追隨と爲さんや。

ここで阮籍は、海鳥と鸞鳩という全くスケールの異なる大小の鳥を呈示し、みずからをその矮小な鸞鳩になぞらえている。だが、それは決して自己を客觀視することでもなければ諦觀でもなく、實は海鳥のごとき壮大な存在となることに、なお断ち難い未練を抱き續けている。だからこそ、宏大な世界を知らぬわけではないと敢えて言明し、また海鳥の雄大な飛翔に對して、みずからこれに見切りをつけたような負けおしみを言い、そしてかかる現在の自己の境遇を、「自足」といういかにも悟りきつたような、その實で、きあいの哲學用語でしかない言葉で、ともかくも肯定してやらぬことには納まりがつかなくたのである。

更につけ加えれば、上に擧げた其二六の詩とは全く正反對の詩、つまり、大小異なる存在を列舉した上で、その大なるものに就こうとする詩が、一方に確乎としてあることにも、阮籍の莊子的思想に對するわだかまりが露呈していよう。例えば其二四の詩では、「玄鶴」という雄大な鳥に心を寄せ、

六

以上を要するに、阮籍は魏晉の際という険しい時代に位置して、保

身のためには目立たぬ存在に甘んずべきだということを認めながらも、やはりもしも時代情況が許すならば、生き生きと躍動する現實社會の中で、人々の稱賛を集めるような功業を成し遂げたいという野心を捨て切れなかつたようである。果たして、彼は文字通りの隱者とはなり得ず、司馬氏に歸屬してそれなりの社會的な位置と生命の安全を確保する一方、それと引き替えに、政界の大局には一切積極的に關與せぬ、いわば俗中の隱者となつた。だが、この陸沈という生き方に、阮籍は心靜かに安んずることができたわけではない。彼にとつて自己の現狀は、依然として中途半端な隱遯であり、また、場違いでしかも不完全燃焼の社會参加でしかなかつた。彼は、魏晉の間を生きたどの文人とも異なつて、歸屬すべき精神的基盤、自己の全てを擧げて參與すべき場を、この世のどこにも持たない。阮籍が、その賦において、完全に自己を同化し得る對象を何者にも求め得なかつたこと、また「詠懷詩」において繰り返し世俗を否定し、そこからの脱出を叫ぶことによつてしか自己を表現し得なかつたこと、これら阮籍の作品を特徴づけ、また當時の文學史から彼を孤立せしめる全ての事象は、まさしく彼という存在のこの孤獨なあり方に由來するものだったのである。かの「獼猴賦」において、異國の宮廷内に繫累せられ、時としてわが醜態を自覺しつつも主君に媚態を盡くして取り入り、揚句のはてにその恥辱のどん底でのたれ死ぬ獼猴は、まさに阮籍その人の影法師であつた。

注(一) 阮籍の論と賦の文學史上における特異性について論じたものに、中島千秋氏の「阮籍の「論」と「賦」とについて」(『日本中國學會報』第九集、一九五七年)という論文がある。

(2) この賦については、すでに中島千秋氏に「阮籍の「獼猴の賦」について」(『中國中世文學研究』第五號、一九六六年)という論文があるが、拙稿は氏の説とは著しく見解を異にする。

(3) 前漢の賈誼にみみずくを詠じた「鵬鳥賦」があるが、これは作者と鵬鳥との對話形式を取つた一種の述志の賦であつて、この鳥そのものを描くことに眼目があるのではない。よつて考察の對象から外した。

(4) 『藝文類聚』卷九一、鳥部(中)に收められた本文は、以下のごとくである。「美洲中之令鳥、超衆類而殊名、感陽和而振翼、遁太陰以存形。遇旅人之嚴網、殊六翮而無遺。身挂滯於重縲、孤雌鳴而獨歸。豈余身之足惜、憐衆鶴之未飛。分稟軀以潤鑣、何全濟之敢希。蒙含育之厚德、率君子之光輝。怨身輕而施重、恐往惠之中虧。常戢心以懷懼、雖處安其若危。永哀鳴以報德、庶終來而不疲。」なお鈴木修次氏がつとに指摘されているように、これと同題名の賦が、建安七子のメンバーである王粲、陳琳、應瑒、阮瑀にも見えることから推して、一堂に會しての競作であつた可能性が強い。(『漢魏詩の研究』第三章第二項(二)(一)参照)

(5) 原文は以下のごとくである。「餘酒酣耳熱、權顧未伸。遂戲猴而縱猿。何歡敗之驚人。戴以赤幘、襪以朱巾。先裝其面、又丹其脣。揚眉蹙額、若怒若頤。或長眠而抱把勒、或嘔昨而齟齬。或頤仰而脚闕、或悲嘯而吟呻。既似老公、又類胡兒。或低眩而擇瑗、或抵掌而胡舞。」(『藝文類聚』卷九五、獸部(下)所收)

(6) 原文の概略は以下のごとくである。「原天地之造化、實神偉之屈奇。道玄微以密妙、信無物而弗爲。有王孫之狡獸、形陋觀而醜儂。顏狀類乎老公、軀體似乎小兒。生深山之茂林、處嵒巖之峻崎。性獯瘠之猶疾、態塞出而橫施。同甘苦於人類、好哺糟而嚙醜。乃設酒於其側、竟爭飲而閉馳。項陋醜以迷醉、曠眼睡而無知。暫擊鑿以縲縛、遂纒絡以廢羈。歸鎖繫於庭廡、觀者吸呻而忘疲。」(『初學記』卷一九、獸部所收)

(7) 注(2)を参照。

- (8) 代表例として注(4)を参照。
- (9) 注(1)を参照。
- (10) このことに關して、拙稿とは觀點が異なるが、大上正美氏が「阮籍詠懷詩試論——表現構造にみる詩人の敗北性について」(『漢文學會會報』(東京教育大) 第三六號、一九七七年)という論文ですでに論じておられる。
- (11) 「詠懷詩」の作品番號は、上海古籍出版社刊『阮籍集』上下卷(一九七八年、活字排印本)に基づく。また他の作品もこれを底本とした。
- (12) その最も明解整然たる部分を挙げれば以下のごとくである。「人力勢不能齊、好尚舛異。鸞鳳凌雲漢以舞翼、鳩鵲悅蓬林以翻翔。蜻浮八濱以濯鱗、鼉頰行潦而羣逝。斯用情各從其好、以取樂焉。據此非彼、胡可齊乎。」
- (13) 『文選』卷二三所收。その趣旨は、首尾一貫して卑小な存在に自足することを積極的に肯定せんとするもので、阮籍の「獼猴賦」のごとき破綻は全く來していない。
- (14) 『晉書』張華傳、及び『藝文類聚』卷五六、雜文部(二)に引く王隱『晉書』。
- (15) 南朝梁の江淹も、その「雜體詩」において阮籍の「詠懷」を模倣する際に、以下のごとく莊子の思想を色づけに用いている。「青島海上遊、翳斯高下飛。沈浮不相宜、羽翼各有歸。飄飄可終年、沈澹安是非。朝雲乘變化、光耀世所希。精術術木石、誰能測幽微。」(『文選』卷三二)
- (16) この點において、林田愼之助氏の「魏晉南朝文學に占める張華の座標」(『日本中國學會報』第一七集、一九六五年)における説には少なからず疑問を覚える。すなわち、氏は張華の「鶴鷄賦」を時代状況に對する危機と不安の意識、及び自己の生存そのものへの悲哀の癡視を表明した作品と解釋し、そこに阮籍との内面的な繋がりを見出そうとしておられる。また、張華を阮籍の「大人先生傳」中の仕官の士に見たてる中島千

秋氏の「張華の「鶴鷄の賦」について」(『支那學研究』第三二號、一九六六年)にも、阮籍を大人先生その人と見なす前提に立っている點で、やはり疑問を覚える。